

【発表 NO. 13】

実践発表

漫画を活用した小中学生向け日本語学習教材の開発

—子どもがワクワクする学習をつくることを目指して—

池田拓郎（株式会社 NHK エデュケーショナル）

神谷圭市（公益財団法人日本財団）

1. 本発表の目的と背景

日本財団では、外国ルーツの子どもを支援する新しい教材の開発を念頭に、全国 35 か所の学校や地域日本語教室の支援現場等に対し、2024 年から 2025 年にヒアリング調査を実施した。その結果、現場や子どもの実態に合う教材が不足していることが明らかとなった。体系的な日本語学習教材の整備は、散在地域で学ぶ子どもが依然多く、専門性を持つ人材の確保・配置が不足していること（文部科学省，2024）からも重要と言える。

そこで日本財団は、転入学前・直後から「日本語でできること」を広げ、人間関係構築と学習参加を支える教材の提供を目標とし、カリキュラム、スライド教材、指導案、宿題が一体となった教材を NHK エデュケーショナルに委託し、開発中である。本教材は漫画を核とし、語彙や表現を具体的な場面の中で示す点に特徴がある（図 1）。漫画が成人学習者の関心を引くことは指摘されている（熊野，2010 等）が、漫画を活用した教材が子どもの日本語教育の現場でどう取り入れられ、どのような効果をもたらすか十分に検討されていない。そこで本発表では、開発中の教材で実践を行った際の子どもの反応や教員への聞き取りをもとに、児童や教員が教材をどのように捉えたか、2) 漫画を日本語学習に活用することの可能性と課題について検討する。



図 1 開発中の教材の抜粋

2. 実践の概要

2.1 実践の場所と特徴

実践は、2025 年 6 月に福岡市の協力を得て行った。同市は、日本語教育の有資格者を 28 名配置し、拠点校方式の初期指導体制が整備されており、多様な指導経験を持つ日本語教員が指導に携わっている。本発表では、拠点校の一つ、X 小学校での 2 回の実践を分析の対象とする。

実践場所	福岡市 X 小学校	授業 形態	①教員 A（日本語指導歴 14 年）・児童（小 4、来日 2 か月） ②教員 B（日本語指導歴 1 年）・児童（小 5、来日 9 か月）
目標	好きな物事を尋ねたり、答えたりできる。		

2.2 授業の流れ

スライド教材や漫画の活用方法は教員に一任し、指定しなかった。それぞれの教員による多少のアレンジはあったものの、教材の構成上、どちらの授業でも、大まかには 1) 漫画を読む活動、2) 1 往復程度の話す活動、3) 2 往復以上の話す活動、4) 書く活動と進んだ。

3. 実践のふり返り

3.1 視点 1 漫画は児童の日本語の理解・表現や学ぶ姿勢にどのような影響を与えたか

本実践のデータからは、漫画が児童の日本語理解を語彙知識の有無に関わらず後押ししていたことが窺われた。教員Aは漫画を読む前に明示的な語彙指導を行い、教員Bは行わなかったが、いずれの授業においても、児童は物語の大意を把握し、スムーズに学習目標を達成した。

教員Aは語彙指導をしたものの、「意味と言葉が理解できるかな」という点に不安を感じていた。しかし、実際には児童は「視覚的な刺激があると興味を持ち、関心も高かった」と述べている。教員Bは語彙指導を省いても「児童は「ミミズ」などの〔未習の〕語彙もすぐに理解した」と述べている。これらは、教員Bが「目で見て分かるものが大事だと思っている」と述べているように、漫画が語彙を状況や文脈の中で推測・理解することを支えていたことを示唆している。さらに、教員Bが「児童が前のめりになるのを初めて見た」と述べているように、どちらの授業でも児童が既知の語彙を見つけると自発的に発話する様子や、オノマトペに対して笑いながら反応する姿が観察された。これらの反応から、漫画は単に日本語の理解を支えるだけでなく、わからない部分を含んだままでも読み進めたり、聞いたりしようとする姿勢や、発話への心理的なハードルを下げる効果を持っていたと考えられる。

3.2 視点2—教員は漫画をどのように捉え、どのように使用していたか

教員への聞き取りでは、漫画を教材とすることが、教員の授業運営や教材観に影響を与えている様子も読み取れた。上記の通り、語彙指導の有無に違いはあったが、両者とも漫画を児童の理解を制御するものではなく、児童の反応を引き出すものとして捉えていた点は共通している。教員Aは自身の音読の後、児童がリピートすることを計画していたが、「児童が漫画から自分の知っている言葉を発見して言いたがるので、自分で読ませるように急遽切り替えた」と述べている。これは漫画が児童の理解と参加を支えているという手応えによるものであったと考えられる。

また、どちらの教員も事前に用意されたスライド教材に、漫画のコマを切り抜いて挿入するなどの工夫を行っていた。加えて、教員Aの「少々難しくても本はダメでも漫画なら、と思うかもしれない」という発言からは、教員が漫画を導入段階の補助教材としてだけでなく、授業展開の軸としたり、学習の可能性を広げたりできる教材として評価していたことが窺われた。

4. 考察と今後の展望

本実践のデータは、漫画が語彙や表現の理解を助けるのみならず、オノマトペに親しむ、積極的に発話するといった、「ワクワクする学習体験」を提供する可能性を示唆している。また、そのような実践は本教材に可能性を見出し、創造的に使用した教員との相互作用の中で生まれた点も指摘に値する。今後は、専門性を有する人材が不足する地域や、指導者のいない環境で本教材を使用する際に、同様の目標を達成することができるのか、さらなる検討・開発が必要である。

付記

共同研究者：米本和弘（東京学芸大学／本教材の全体監修）

【引用文献】

熊野七絵（2010）「日本語学習者とアニメ・漫画：聞き取り調査結果から見える現状とニーズ」『広島大学留学生センター紀要』20号，pp.89-103

文部科学省（2024）「令和5年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000037366_4.pdf